



↓自分の音が自分を育てる

3歳からはぐくむ「本能的創造性」 [créativité instinctive]



子どもたちとオーケストラが同じ舞台上で共演 アゴペ氏の企画協力: CULTURE FRANCE

音楽

ジャン・ルイ・アゴペ氏 Jean Louis Aopbet は、数々の賞に輝き世界中で賞賛されるフランス人作曲家である。そして彼は注目される音楽教育家というもう一つの顔も持つ。

以前からアゴペ氏は、美術界では美術館などで子どもの教育活動が積極的に行われているのに、音楽界ではそのような活動がほとんど行われていないと感じていた。また子どもに音楽家の仕事内容がほとんど認識されていないばかりか、音楽をきかんと聴いたこともない子どもが大変多いことも懸念していた。周囲に音楽家が全くいない環境で育ち、作曲家になる過程で苦労した経験を持ち、なるべく幼少時から音楽を「学ぶ」ことが大切か、身をもって知っていたからだ。

三歳児さえも、自分で表現できるという潜在能力を持つ。しかしその能力を表に出すには、まず「きっかけ」を見つけてあげることが必要だ。アゴペ氏は「この『きっかけ』を見いだすために音楽教育家になったのである。子どもたち全員に「音楽家」になつてほしいわけではなく、子どもたちが自分で自分の「音」を創り出せるようにしたい。

「本能」に従って「音」を創り出す子どもたちが「本能」に従って「音」を開放することを彼は望む。なぜなら「音」を開放できたら子どもたちは「聴く」「話す」そして「創る」こともできるようになるからだ。

アゴペ氏のこのアプローチは、「音」は音符を使って翻訳できるのではなく、「音」はすべてという言葉の起源であるという考えに基づいてきた。

「音」は「意味」と同じで、「言語」を創りだすために組み合わせられる。つまり「音」は「子どもの教育」の基本なのだ。

「本能」に従って「音」を開放できたら子どもたちは、日常生活でも自分たちを取り囲む音を聴くようになる。そしてもっと本格的に音楽に近づきたいと思うようになる。

実際、アゴペ氏のユニークな教室を体験した何人かはその後目覚ましい成長を遂げ、交響楽団や有名ソリストたちとともに自分たちの楽器で自分の楽曲を演奏するコンサートを開催し、大きな成功を収めている。

フォーカス

アゴペ氏は教室で「私の仕事は作曲することです」と挨拶あいさし、子どもたちに音楽の一部をランダムに聴かせた。

次に「大きく開放された耳の段階に入る。ここで子どもたちは自分の聴いたことを、自分の言葉で、音楽専門用語を使わずに表現。続いて自分の「音」を出す。第一の楽器である自分の声と、日常のオブジェを使い、楽器は使わない。自分で選んだ「紙の箱」「定規」「ピンポン球」などを動かして、たたく、こすったりして自分の「音」を出してみる。

やがてすべてのオブジェが音源となる。子どもたちの「音」の芸術がだんだん軌道にのっていく。

「遊び」のなかで自分の「聴く」感覚を研ぎ澄ませ、彼らは極めて真剣に自分の「音」を創り出している。その過程で子どもたちは「聴取」「解説」「発見」「分析」そして「創作」の段階へと進んでいく。やがて彼らは自主的に、自分の創る「音」と周囲の友だちの創る「音」とを自由に調和させ、オリジナル楽曲を創作するところまで成長していく……。



アゴペ氏が教室で「私の仕事は作曲することです」と挨拶あいさし、子どもたちに音楽の一部をランダムに聴かせた。



「共育」 Culture

～あの時の残像＝アート～ 教師が盤面で見、学校で学ぶ芸術の意味

「負けました。大きな瞳に涙が溢れ、悔しさを抑えようとして必死に駒を握っています。暁星小学校の将棋クラブでその小さな一コマは一時が止まったようにその残像が今でも私の脳裏に刻まれています……」

現代社会で「負けました」と自分の負けを宣言できる場面は果たしてあるでしょうか。今まではたしかにあったものなのに、いつのまにか失われてしまったもの……頭張る気持ち、我慢すること、相手を待つこと、一つのことを互いに考える時間ゆとり……。そんな将棋の持つ教育的効果がいま注目されています。それは、キレる子、我慢できない子が問題視される中、じっくりと考える集中力、相

「負けました。大きな瞳に涙が溢れ、悔しさを抑えようとして必死に駒を握っています。暁星小学校の将棋クラブでその小さな一コマは一時が止まったようにその残像が今でも私の脳裏に刻まれています……」

現代社会で「負けました」と自分の負けを宣言できる場面は果たしてあるでしょうか。今まではたしかにあったものなのに、いつのまにか失われてしまったもの……頭張る気持ち、我慢すること、相手を待つこと、一つのことを互いに考える時間ゆとり……。そんな将棋の持つ教育的効果がいま注目されています。それは、キレる子、我慢できない子が問題視される中、じっくりと考える集中力、相

映画

↓芸術映画を体験できる場広がる

最近、多くの美術館が展開する子ども向けプログラムで映画が取り入れられている。例えばルーヴル美術館内では、彫刻を映像に「というユニークなスタジオがあり十二歳から通える。さらに最近の傾向として注目すべきは、子どもに創造性の高い映画を見せるだけではなく、子どもたちが自ら芸術的な映画を撮るよう、映画界の技術者たちがサポートしていること。

パリでは「ベニシヨニシマ」がある。文字通り、セーヌ川に浮かぶ船(ベニシヨ)をスタジオにして、子どもたちが脚本から演技や演出、撮影、編集まで上乗りの映画制作のプロセスを、週末を二回使った十日間で体験。親と一緒にワークショップでは、家族ドラマを、もちろん日本でも、そうした活動ができる場が増えてきた。東京国立近代美術館の「X.M.S. Cinema」のプログラムがあり、またパナソニックによる「X.M.S. (モッド・ウィットネス、ニューヨーク)も貴重なプログラムといえる。X.M.S.では、子どもたちがニューズドキュメンタリー、映画などの制作過程を、最先端のカメラを駆使して一通り体験できる。さらにパナソニックは、五月末に子どもたちが使うことを前提として、日本全国の数校に新商品の「ローカド」のHDメモリーカード「カズレローダー」を貸与する。映画には技術の進歩が欠かせないが、この計画ではプロフェッショナルではない子どもにも、最先端技術を提供し親しんでもらうことを目的としている。

子どもたちに映画制作を体験できる「場」を与えているのは、M.C.A.C(日本映画映像文化振興センター)の「子どもシネマスクール」プログラムの指導で子どもたちが映画のすべてのパートを体験できる。

映画界の本格サポートで本物づく

子どもが制作活動も体験しながら芸術映画と触れ合えるプログラムとして注目されているのが、川崎のシネコン、チネチッタの二十周年特別企画。子どもたちによる

「負けました。大きな瞳に涙が溢れ、悔しさを抑えようとして必死に駒を握っています。暁星小学校の将棋クラブでその小さな一コマは一時が止まったようにその残像が今でも私の脳裏に刻まれています……」

現代社会で「負けました」と自分の負けを宣言できる場面は果たしてあるでしょうか。今まではたしかにあったものなのに、いつのまにか失われてしまったもの……頭張る気持ち、我慢すること、相手を待つこと、一つのことを互いに考える時間ゆとり……。そんな将棋の持つ教育的効果がいま注目されています。それは、キレる子、我慢できない子が問題視される中、じっくりと考える集中力、相



『おじさん公園のひみつ』撮影現場 ©Photo Yuichi Nagata

← PAGE 3 親子で味わう GOLDEN WEEKのプログラム

広告特集 KODOMO TOKYO